

●沿革

- 創業(1945年)
- 昭和20年10月 現相談役:横塚元吉が当地にて、個人で創業し、明治乳業(株)を荷主として原乳輸送を開始
- 昭和60年 3月 スーパーマーケット、コンビニエンスチルドの輸送開始
- 平成12年 3月 外食産業の一時保管・仕分・店舗配送業務を開始
- 平成13年 3月 ISO9002を認証取得 登録番号JQA-QM6283
- 平成13年 4月 旭運輸株式会社からアサヒロジスティクス株式会社へと社名変更
- 平成14年10月 ISO9001:2000を認証取得
- 平成17年 4月 代表取締役社長 横塚正秋氏が、代表取締役会長に就任
- 平成17年 4月 代表取締役専務 小川修氏が、代表取締役社長に就任

●社員数：915名(平成17年3月末現在)

●拠点：物流センター14ヶ所。営業拠点7ヶ所

●保有台数：503台(平成17年3月末現在)

●主たる輸送貨物：スーパーマーケット、外食産業、コンビニエンスストアを主な荷主として、完全受託型の食品物流を展開。取扱品目は、チルド食品、生鮮食品、冷凍食品、加工食品、住居関連用品、牛乳、乳製品、鶏卵、清涼飲料水、その他食品全般

●本社：埼玉県比企郡嵐山町花見台7-1

TEL.0493-62-1211(代) FAX.0493-62-6699 <http://www.asahilogistics.co.jp>

NEXT 次回のSRニュース

本号ではアサヒロジスティクス様の本社での取り組みについてご紹介いたしました。次号は引き続き嵐山研修センターでの取り組みをご紹介いたします。また、各営業所におけるセーフティレコーダの具体的な活用方法、特に高得点を出すためにどのような工夫をされているか、ドライバーの方々のインタビューを中心に特集していく予定です。どうぞご期待ください。



VIDEO ビデオのご案内

「人とくるまのテクノロジー展2005」はお陰様で盛況のうちに無事、終了いたしました。多数ご来場頂き、またご協力賜りましてありがとうございました。

なお、アサヒロジスティクス小川社長様の講演会の模様をビデオに収めました。ご希望により無料にて配布いたします。詳細は下記までお問い合わせください。

SRNEWSに関するお問い合わせはこちらまで

発行:株式会社データ・テック **datatec**

〒144-0052 東京都大田区蒲田4-42-12新生ビル TEL:03-5703-7041 FAX:03-5703-7043 <http://www.datatec.co.jp> 担当:山田(sales@datatec.co.jp)

SRNEWS

VOL.20



6月号 2005年6月30日

コーザ探訪

アサヒロジスティクス株式会社

代表取締役会長 横塚正秋様

セーフティレコーダを使って企業風土の変革を！
～安全No.1会社を目指して～



■はじめに

物流企業は安全確保が最大の義務との考えのもと、アサヒロジスティクスでは常に安全に対し高い目標を掲げてまいりました。当社で取り組んできた安全対策と、セーフティレコーダの導入に至った経緯をお話させていただきます。

■精神論から具体的な指導へ

以前の物流業界における安全教育は「事故を起こしてはいけない」という言葉のみのものでした。しかし事故を起こさない運転の指導とは大変難しいものでした。精神論から具体的な指導に発想を変えたくとも現状(日常運転)を把握する手法がなかったのです。

■全車アナタコ搭載

そこでまず現状把握の手段として全車両にアナタコ(アナログ式タコグラフ)を搭載しました。20年以上前の当時、2t車など小型車量にまでアナタコを搭載した企業は珍しかったと思います。

■常識を持った企業集団

第一に『社速』※(高速90Km/h、一般60Km/h)を定めました。ドライバーは運行終了後、自分のチャート紙に社速を守れたか否かを○×で記し、壁に掛けて帰ることにしました。いわゆるPDCAサイクル(計画、実行、チェック、改善)の仕組みです。これによって、社速の違反は激減しました。

次に、速度、シートベルト、車間距離の三本柱を人事考課に反映することで、常識を持った企業集団を目指し全社員一丸となって取り組みました。現状把握はある程度できるようになったものの、チャート紙の分析に時間がかかるなどの問題はありました。

■デジタコ導入

3年ほど前に取引先からデジタコ(デジタル式タコグラフ)搭載の要請があり、それを機に200台の車両にデジタコを

搭載しました。アナタコに比べ現状把握が簡単で分析も容易になりましたが、アナタコで社速管理を行ってきたドライバーにはあまり変化がみられませんでした。

■「自己流の運転を変える教育」

速度遵守はできましたが、自己流になってしまっている運転習慣を変えるまでには至りませんでした。教習所では一人一人の運転傾向を見極めた指導は行ってくれません。そこでセーフティレコーダを試してみました。すると、デジタコで高得点だったドライバーが『危険運転』と指摘を受け、点数が低く出ました。デジタコは設定値(速度)を守っていると高得点を取れますが、セーフティレコーダは自然に身につけてしまったクセを修正しないと高得点が取れません。そこでドライバーは高い得点を目指して自ら学習し、自己流の運転を改善するようになりました。その様子から自己流の運転を変える強力な武器になると判断し、現在までにセーフティレコーダを440台導入しております。その結果、運転マナーの習得、エコドライブなどさまざまな好影響が現れ、ドライバーの顔つきも変わってきました。全てのドライバーの顔つきが変われば外から見えるアサヒロジスティクスも変わってきます。セーフティレコーダを通して企業風土そのものが変わるといっても過言ではありません。

次のページでは具体的な運用や効果をご紹介します。



※『社速』はアサヒロジスティクス独自に規定した速度です。



「管理なき管理体制の構築 (セルフコントロール)」 ～セーフティレコーダの活用～

消費者に近い物流の業務を行って
いく上で、交通事故は社会的に絶対に
あってはならないことと考えています。
また、事故を起こすことで交通事故加
害者という名の被害者になってしまう
ことから社員を守らなければなりません。
自社では交通事故は絶対になくなら
ないという前提に立ち、さまざまな安全対
策、特にセーフティレコーダを用いた対
策を中心に予想以上の成果を上げる
ことに成功しています。

『人とくるまのテクノロジー展』

講演者：小川 修 氏
(アサヒロジスティクス株式会社 代表取締役社長)
日時：2005年5月20日(金) 16:00～16:30
会場：人とくるまのテクノロジー展
新製品・新技術紹介コーナー



1. 事故対策1

研修センターでは、
消費者の方々との
接触を想定して接客
態度などのスキルを
重視して講習を行っ
ています。また事故
や法律違反などによ
って自社にはもちろん、
顧客にとっても大きな損失を与えてしまうことを社員にしま
りと理解させるように努めています。

事故対策 Step 1

■ 嵐山研修センターでの教育

- ・講習
 - ①会社理念の共有化(ユニフォーム着用、挨拶。。。)
 - ②法律遵守(速度、過積載、長時間運転、シートベルト、飲酒)
 - ③運転技術、整備技能
- ・アサヒセーフティライセンス(社内免許制度)
3級(6ヶ月以内)、2級(2年以内)、1級(3年以内)

さらに、近年のトラックは性能の向上が著しく、通常の運転免許
の取得だけではカバーできない運転スキルが必要となっています。
そこで自社では車内免許制度を導入し、より質の高い運転スキルの
獲得を試みています。

2. 事故対策2

自社トラックの安全
対策装置として、
見やすいカラー仕様の
バックカメラ、左折時
の巻き込み事故を防
ぐためのサイドカメラ、
車間距離センサ、
そしてドライバーの安
全運転スキルを客観的に評価するためのセーフティレコーダなど
を搭載しています。

事故対策 Step 2

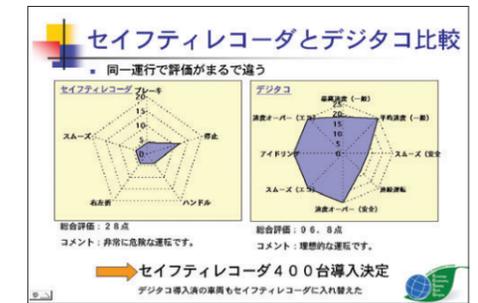
3. デジタコとの比較

デジタコで事故は減らない

自社では3年前から200台のトラックに対してデジタコを導入し
てきましたが、デジタコでは車の細かい挙動の判定ができな
いため評点が甘くなる傾向があり、ほとんどのドライバーが
高得点だったにもかかわらず事故は減りませんでした。

より確かな診断

これに対してセーフティレコーダは加速度センサとジャイロ
センサを備えているため、より細かくチェックが行えるよう
になり、デジタコでは高得点だったドライバーもセーフティレコーダによる評価ではかなり低い点数となっ
てしまうことがわかりました。



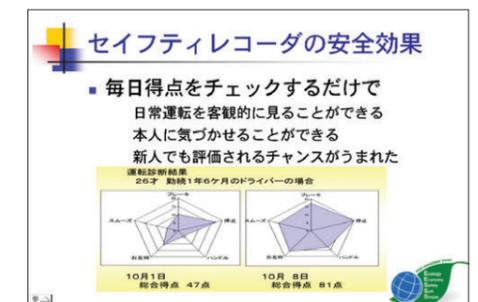
4. 安全効果

運転状況の把握

導入当初はほとんどの社員が20～40点の低得点であり、ま
た「見張られる」「試される」など疑いの反応がありまし
たが、車とドライバーは配達業務に出てしまう訳ですから
どうしても完全に管理しきれものではありません。

ドライバー自身の気づきが重要!

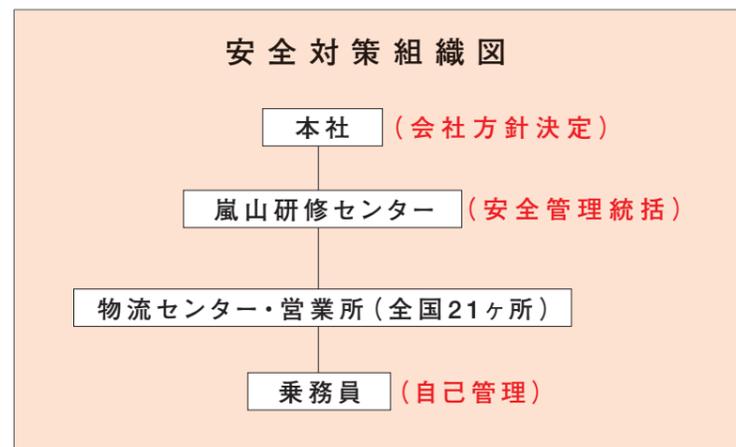
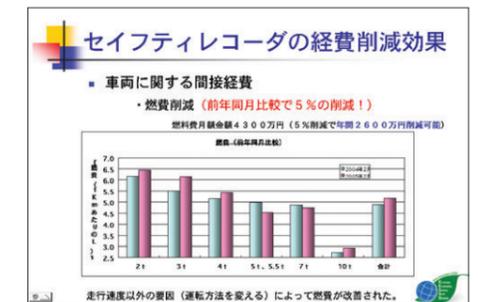
さらに事故を起こした社員の話で多いのが「まさか自分が」
という言葉でした。
それは自分の普段の運転が危険であるということに気づいていないことだ
と思います。そこでこのような点数を見て、社員一人一人が自分の運転の特性に気づいてもらうことが重要と
考えました。



5. 経費削減効果

月間174万円の増収!

もともと厳しく燃費管理をしていましたが、セーフティレコーダ
を導入後、さらに5.4%強(2005年4月実績)の削減効果が得
られました。
また、ブレーキと発進の摩擦によるタイヤの消耗には年間
4,800万円の支出をしていましたが、これを15%削減でき、さら
にブレーキやクラッチの磨耗も抑えられることを考えれば、メン
テナンスの面から考えても効果があります。



セーフティレコーダの導入費用である月間リース料をプラスしても、次のようなコスト削減結果が具体的に表れています。

月間燃費節減(460台、1リットル83円として)	280万円
月間メンテナンス費用節減	60万円
月間セーフティレコーダのリース料	△166万円
月間増収合計	174万円

このようにランニングコスト削減に大きな効果が得られたため、セーフティレコーダ導入初期投資が短期間で償却でき大変満足しています。